

## 本書刊行にあたって

はじめに

先般、『図解 近畿の城郭』全五巻の刊行を終えた。まずはこの快挙を祝いたい。城郭研究の一翼を担う縄張り研究は古くよりおこなわれてはいたが、その精度は曲輪の位置や配置を描くのみの大雑把なものであった。そうしたなかで異彩を放つのが、山崎一氏による『群馬県古城墨史の研究』（一九七八年、群馬県文化事業振興会）である。山崎氏は群馬県の中世城館跡を個人ですべて踏査され、その縄張り図を作成された。氏の縄張り図では曲輪の配置に止まらず、土塁・堀切といった中世城郭の構造を正確に図化され、中世城郭研究を志す人たちのバイブル的存在となった。しかし、全国的に縄張り図の精度が飛躍的に高まったのは東京の中世城郭研究会による一九八〇年代からの踏査によるものである。特に本田昇氏による縄張り図は極めて精緻で、現在でもまったく色あせない。氏の作図は中世城郭研究会のメンバーに大きな影響を与え、関東を中心とした中世城郭の縄張り図が次々と作成されていった。

ちょうどこの時代、一九八〇年に村田修三氏が『日本史研究』第二一一号に「城跡調査と戦国史研究」を発表され、「中世の城郭遺跡を地域史と在地構造分析の史料として活用すること」によって、かつては好事家と呼ばれる人たちの趣味の対象から、中世史の「史料」として評価されることとなった。

さらに、一九七〇年代の日本は高度経済成長の真ただ中にあり、山をも飲み込む宅地造成や高速道路、工場用地が建設されることにともない、列島全域で山城跡の発掘調査がおこなわれることとなり、考古学からも城跡の再評価が高まった。こうした開発に事前に対応するため、さらには国史跡に指定するために、文化庁の補助事業として都道府県単位で悉皆調査が実施されることとなった。一九七四〜七五年度の三重県を皮切りに、現在ではほぼ全国で事業は終了している。近畿では三重県や兵庫県が先発部隊となり、滋賀県では全十冊におよぶ報告書が刊行されたものの、大阪府では補助事業としての調査は実施されず、京都府はようやく終了し、奈良県が現在刊行予定と、中心部は低調であった。

この悉皆調査は、府県内のどこにどのような城館遺跡が存在するのかを公的にはじめて調査したものであり、その成果は大いに評価されるものである。ただ、残念ながら調査に従事された調査員がすべて城館跡調査、つまり縄張り調査に精通された人たちではなく、この調査の研修によって初めて縄張り図作成をされた場合が多い。つまり、位置は確実に押さえられているものの、縄張り図には精度の高いものと低いものが共存することとなっている点はいたしかたのないことであった。とりわけ、調査年次の古いものはこれが顕著に表れている。

一方、こうした悉皆調査とは別に、全国の城館跡をまとめる事業もおこなわれた。それが『日本城郭大系』全二十巻（一九七九〜八一年、新人物往来社）の刊行であった。それ以前にも『日本城郭全集』全十六巻（一九六七〜六八年、人物往来社）の刊行があったが、『日本城郭全集』は市町村史や郡志といった刊行物から城館跡を抽出して編まれたもので、基本的には縄張り図が用いられることはなかった。それが『日本城郭大系』ではようやく縄張り図が用いられたのだが、極めて少例でしかなく、その精度も低いものであった。こうした書籍で、原則一城館跡に必ず縄張り図を添付するという画期的なものとなったのが、村田修三編の『中世城郭事典』全三巻（一九八七年、新人物往来社）であった。縄張り図をもとに城館跡の構造そのものを分析し、かつ現存する遺構の年代を検討した

画期的な城郭研究書である。これによって、中世城郭研究には縄張り図が必須となったと言っても過言ではないだろう。編集に携わった執筆者たちの大半は、当時新進気鋭の縄張り図を描く研究者たちであった。

縄張り図は、単に現存する遺構を図化するだけでなく、なぜここに曲輪があるのか、虎口構造はどうなっているのか、土塁に屈曲は付けられているのかといった、城郭構造を把握できる洞察力があってこそ描けるわけである。つまり、城郭構造を読み込める視点を有する研究者たちが『中世城郭事典』に関わったのである。ただ、まだ時期は尚早であった。列島規模で縄張りを描く研究者は少なく、地域によってはまだ縄張り図とは呼べない作図も存在したのである。つまり、『中世城郭事典』の刊行は、研究史的には縄張り図が城館研究に不可欠であることを決定づけた画期的事業ではあったが、資料として利用できる縄張り図ばかりが掲載できたわけではなかった。

その後、二〇〇〇年代に入ると、全国各地で縄張り図が描かれるようになる。さらには、こうした二〇〇〇年代以降の研究者による縄張り図の精度は飛躍的に高まる。それは歩測だけではなく、距離計測器の利用や、GPSを用いてさらに精緻な図面作成がおこなわれるようになったからである。誰が描いた縄張り図でも、ほぼ同じような遺構判断がなされ、ほぼ同じような図面になってきたのである。

かつて村田修三氏が指摘したように、城郭遺跡を「史料」として扱うのであれば、その「史料」にばらつきがあってはならない。誰が描いた縄張り図でも資料として活用できることが大事なわけである。少々長い前置きとなってしまったが、先般刊行された『図解 近畿の城郭』では全五巻を通じて縄張り図は精緻を極め、掲載された城館の縄張り図が資料として扱える書籍となっている。この価値は大きい。

#### 残された課題——近江地方の畝状堅堀群を事例として

だが、一方で課題も多く残されている。ここでは代表例として、畝状堅堀群の分布の問題を取り上げてみたい。いうまでもなく、畝状堅堀群は山城の切岸に巨大な包丁で切目を施した堅方向に設けられた堀切が連続して築かれたもので、一九七〇年代後半から八〇年代前半に新潟県で初めて報告された防衛施設である。『日本城郭大系』において、大葉沢城（新潟県村上市）の縄張り図で伊藤正一氏が「畝形阻塞」として発表されたときは衝撃であった。人工的なものではなく、自然地形ではないかとの見解もあったが、次々と類似遺構が確認され、人工的な防衛施設であることが明らかとなった。確認された当時、その数は数える程度であったが、精度の高い縄張り図が作成されると、その数は急激に増加したのである。つまり、それまでは斜面地に踏査の手が及んでいなかっただけだったのである。精度の高さを裏づけるものは、やはり城域のすべてを踏査することであった。『図解 近畿の城郭』の刊行により、ほぼ近畿地方の全域に畝状堅堀群の存在することが明らかとなった。また、巨大な山城から小規模な山城まで様々な山城に用いられていることもわかる。

だが、滋賀県の山城にはほとんど畝状堅堀群が用いられていないことも明らかである。滋賀県では県の悉皆調査によって約一三〇〇ヶ所に城館跡が分布することが明らかとなっている。そのなかで畝状堅堀群が認められるのは、湖北では小谷城月所丸（長浜市）、上平寺城・鎌刃城（ともに米原市）、甲賀では朝宮城（甲賀市）、湖西では清水山城（高島市）の五ヶ所に過ぎない。わずかに五／一三〇〇という分布状況である。無きに等しい分布数といっても過言ではないだろう。近江は戦国時代に畝状堅堀群を導入しなかった地域だったのである。

ここで、近江における畝状堅堀群を有する城について見ておきたい。浅井三代の居城である小谷城では、元亀元年（一五七〇）に長政が織田信長を見限り籠城戦が開始される。元亀三年（一五七二）には越前の朝倉義景が一万五千の兵を引き連れて小谷城の救援にやって来るのであるが、小谷城本丸の不備から大嶽に居所を定めたと『信長公記』は記している。信長との戦いのなかで、元亀元年以降も改修が加えられていたことがうかがえる。小谷山が唯一尾根続きとなる北東尾根に構えられているのが月所丸であるが、ここでは尾根を切断する二重の堀切に加え、畝状堅堀群が構えられている。さらには、曲輪を圍繞する巨大な土塁も設けられている。こうした構造は、小谷城のなかでは極めて異彩を放っている。おそらく、月所丸も元亀三年の朝倉義景による改修と見てよい。畝状堅堀群はこの改修によって構えられたものであり、越前の朝倉氏による技術支援としての畝状堅堀群とみてよいだろう。

上平寺城は、湖北の分郡守護である京極高澄によって永正二年（一五〇五）に築かれた山城である。山麓には京極氏の守護所として機能していた上平館が置かれている。その詰城が上平寺城である。畝状堅堀群は上平寺城の先端に放射状に構えられている。上平寺城は大永三年（一五二三）に廃城となっており、その遺構はこの時期のものと考えられていたが、実は約五十年後に再び利用されるのである。浅井・朝倉軍は元亀元年に織田信長を敦賀で挟撃したものの、信長を討つことができなかった。そして岐阜に戻った信長の近江侵攻を阻止するため、越前道（北国脇往還）と東山道（中山道）を封鎖する目的で、越前道には上平寺城が、東山道には長比城が築かれた。『信長公記』には「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」と記されている。江濃国境を封鎖する目的で浅井長政が越前朝倉氏から軍事的支援を受けたものと見てよいだろう。ここに「かりやす（荊安）」と記されているのが上平寺城のことであり、越前道を眼下に見下ろすことができる。その最先端に構えられた畝状堅堀群は越前の山城構築の特徴であり、それが荊安城（上平寺城）に導入されたと考えられる。

鎌刃城は発掘調査の結果、十六世紀後半の礎石建物、石垣などが検出された。その尾根の先端に畝状堅堀群が構えられている。畝状堅堀群自体の調査は実施されていないが、発掘調査によって検出された遺構と同じ時代のものと考えられる。鎌刃城は在地土豪である堀氏によって築かれた城であるが、堀氏は戦国時代後半には少なくとも近江坂田郡を支配する勢力を有していた。当初は浅井氏に属し、荊安・長比の要害を準備していたが、竹中半兵衛により調略され、織田信長方に与している。その後、信長によって所領を没収され、鎌刃城も天正二年（一五七四）頃には廃城になっている。浅井方の国境を準備する重要な城であり、さらには実質的に荊安・長比の築城に携わっていることなどにより、やはり越前朝倉氏の築城の影響を受けて畝状堅堀群を導入したのではないかと考えられる。

甲賀の朝宮城は、甲賀には珍しく四方を土塁で囲い込む方形プランとはならず、山頂部に曲輪を配置する構造となる。こうした構造より、信楽地域は甲賀郡中惣には参加しなかった地域と考えられる。『滋賀県中近世城郭分布調査報告書』では、山頂部に二段に構えられる曲輪のみを報告している。その後、『甲賀市史』にもなう調査によって、曲輪周囲に畝状堅堀群の存在することが明らかにされ、その成果は『甲賀市史』に報告されている。朝宮は南山城の宇治田原から近江に入るルート上に位置している。宇治田原の土豪である山口氏は早い段階で信楽の多羅尾氏と関係を結び、多羅尾光俊は実子光広を山口氏の養子に入れている。織田信長が入京すると、多羅尾光俊は信長と松永久秀との連絡に関わっており、永禄十三年（一五七〇）には久秀の重臣竹内秀勝の娘が多羅尾家に嫁いでいる。こうした多羅尾氏の動向が、朝宮城に畝状堅堀群を築かせたものと考えられる。松永久秀が京への問道として宇治田原から信楽に抜け、近江から京へのルートを確認し、その間を確保するために朝宮城を築いたものと考えられる。朝宮城の畝状堅堀群は松永久秀の築城技術と見てよいだろう。

琵琶湖の西側、湖西地方では佐々木信綱の次男高信が高島郡田中郷の地頭職を得て、高島氏を称した。郡内には

一族が勢力を持ち、高島七頭と呼ばれ、その惣領家が越中家であり、清水山城を居城とした。城の築かれた清水山には城以前に清水寺が構えられており、山腹の曲輪群は清水寺の坊院を利用したものである。

清水山城の主郭切岸に、畝状堅堀群が構えられている。主郭では発掘調査が実施され、十六世紀後半の礎石建物が出されており、畝状堅堀群もこの時期に築かれたものと見られる。導入された経緯は不明であり、ごく普遍的に用いられた防御施設としての畝状堅堀群と考えられなくはない。ただ、高島郡は越前・若狭との関係が深く、戦国時代後半には越前朝倉氏、湖北の浅井氏と行動を共にし、織田信長に攻め落とされている。こうした状況より、畝状堅堀群も朝井・朝倉氏によって構えられた可能性も十分に考えられる。

近江での畝状堅堀群の存在は極端に少ない。列島のなかでも、畝状堅堀群を導入しなかった特徴的な地域として捉えることができる。さらに、近江で畝状堅堀群の認められる諸城の状況を分析した結果、湖西の清水山城を除く四城では外部からの影響下によって築かれた可能性が高いことがわかる。

精度の高い縄張り図が作成されたことにより、畝状堅堀群が決して特殊な防御施設ではなく、むしろ戦国期の山城では普遍的なものであることが明らかとなった。その一方で、畝状堅堀群が存在しない地域を炙り出すこともできた。近江はまさに、畝状堅堀群を設けない地域であることが明らかになったのである。また、畝状堅堀群を有する山城も、普遍的に用いられた防御施設ではなく、湖北では越前朝倉氏による対信長戦に備えた改修である可能性が高いことも判明した。湖西の清水山城を除くと、近江は普遍的防御施設と認められる畝状堅堀群がまったく存在しない地域となる。

では、なぜ近江では畝状堅堀群が導入されなかったのだろうか。他の畝状堅堀群の存在しない地域と併せて今後の課題とした。

#### おわりに

以上のように、畝状堅堀群の問題だけでなく、残された課題・論点はいまだ多い。『図解 近畿の城郭』全五巻には、近畿地方の主要な城館跡の精度の高い縄張り図が掲載された。現状の縄張り研究の到達点として評価されよう。従来、こうした調査成果はゴールとして位置付けられる場合が多い。これだけの資料としての縄張り図の集成はまさにゴールなのであるが、今回、これらの集成をスタートとして位置付け、近畿各府県の城郭の特徴を検討するとともに、縄張り研究のみならず、文献史学・考古学からも最新の研究成果に基づく論点・課題が出され、論集が編まれたことに拍手を送りたい。

なによりも、『図解 近畿の城郭』全五巻がこれからの中世城館跡研究の基礎資料として長く用いられることに期待するとともに、今回の論集がこれからの城郭研究の指針となることにも期待したい。

『図解 近畿の城郭』の執筆・編集に携わった多くの研究者、本論集に論文を執筆された皆さま、そして何よりも現在の厳しい出版状況のなかでこうした書籍を刊行された戎光祥出版株式会社にお礼を申し上げて巻頭のことばとしたい。

二〇一九年九月 長崎県五島福江城跡にて

中井均

# 目次

本書刊行にあたって

中井均 2

凡例 14

## 第1部 滋賀県の城郭の特徴

I 文献から見た滋賀県の城郭

松下浩 16

II 発掘調査から見た滋賀県の城郭

小林裕季 29

III 近江における山寺境内を包摂した山城の縄張りについて

福永清治 46

## 第2部 京都府の城郭の特徴

I 京都府域における城郭関係史料の諸問題

福島克彦 62

II 発掘された京都府の中世前期城館

森島康雄 79

III 縄張りから見た京都府の城郭——年代観を中心として

高田徹 89

## 第3部 奈良県の城郭の特徴

I 中近世移行期における宇陀秋山城主の変遷について

金松誠 104

II 考古学・発掘調査から見た奈良県の城郭

岡田雅彦 120

III 縄張りから見た奈良県の城郭

内野和彦 134

## 第4部 大阪府の城郭の特徴

I 文献から見た大阪府の城郭

天野忠幸 148

II 考古学から見た大阪府の城郭——中世全般を俯瞰して

遠藤啓輔 162

III 縄張りから見た大阪府の城郭

中西裕樹 174

第5部 和歌山県の城郭の特徴

I 十六世紀中頃の紀伊の政治情勢と城郭——湯河氏の動向に焦点を当てて

新谷和之 190

II 発掘調査から見た和歌山平野の中世城館

北野隆亮 206

III 縄張りから見た和歌山県の城館——虎口・空堀・横矢から見る

白石博則 220

第6部 兵庫県の城郭の特徴

I 鎌倉期播磨国庁直指揮下の武士像

依藤保 240

II 考古学から見た兵庫県の城郭

山上雅弘 252

III 縄張りから見た兵庫県の城郭

多田暢久 267

第7部 近畿の城郭をめぐるさまざまな論点

I 近畿における戦国期城郭の石積み・石垣

乗岡実 278

II 中世の近畿における城郭瓦

山口誠司 294

III 近畿の環濠集落

藤岡英礼 312

IV 築城技術者に関する試論

伊藤俊治 324

V 「南朝」の城を検証する——吉野郡・宇智郡の中世城郭

成瀬匡章 338

VI 細川藤孝入城前の勝龍寺城

馬部隆弘 364